



研究ノート

バングラデシュの十二イマーム・シーア派

——来歴と現状

桜井 啓子

早稲田大学国際学術院教授

フマユン・コビル

ノースサウス大学人文学部政治社会学科助教

はじめに

Journal of the Royal Asiatic Society の二〇一四年夏の号¹⁾は、シーア派の特集だった。南アジア研究の重鎮フランシス・ロビンソン教授は序章の冒頭で、「南アジアのシーア派、約六〇〇〇万人は、ムスリム世界では、イランのシーア派に次いで二番目に大きい集団であるが、ごく最近まで彼らに対する我々の知識は、その数に見合っていないかった」²⁾と述べている。またシーア派の中の、特に十二イマーム派は、毎年、ムハッラム（イスラーム暦第一月）にシーア派第三イマーム・フサインの殉教を盛大に追悼することから目立つ存在であるにもかかわらず、研究対象としては注目を浴びてこなかったとも述べている。ロビンソン教授は、序章で南アジアのシーア派に関する先行研究を詳説しているが、バングラデシュへの言及はない。

しかし、先行研究がないからといってバングラデシュにシーア派がないわけではない。バングラデシュの首都ダッカのオールドダッカとよばれる旧市街にある歴史的なシーア派宗教施設であるホセイニー・ダーラーンの紹介冊子（一九九四年発行）には「一九八四・五年と一九九一年のセンサスによるとバングラデシュのシーア派は約五〇〇〇人」³⁾と記されているが、二〇一四年夏にダッカで調査した際には、複数のシーア派宗教指導者が、バングラデシュのシーア派は全国で六万人、首都ダッカで一萬五〇〇〇〜二万人ほどで、大半が十二イマーム・シーア派だと答えている。少数ではある

が、多様な背景を持った人々から成る集団で、ベンガル人改宗者もいるが、大多数は外部から流入した非ベンガル系の人々とその子孫で、出身地や移住の時期なども異なっている。

本稿では、はじめに現在のバングラデシュがあるベンガル地方への十二イマーム・シーア派の流入の経緯を明らかにし、続いて一九九九年⁴⁾ならびに二〇一四年にダッカで実施した調査に基づき、ダッカのシーア派宗教施設を中心とするシーア派コミュニティの現状を明らかにする。最後に、イランの宗教学院で学んだ新しい世代のシーア派宗教指導者の役割や中東のシーア派大国であるイランからの援助が、宗教的・民族的・言語マイノリティであるシーア派にどのような影響を与えているのかを考察する。

十二イマーム・シーア派の流入

バングラデシュは、一九七一年に誕生した若い国であるが、一九四七年から独立までの期間は、インドを挟んで東西に国土を持つパキスタンの一部だった。パキスタン時代、現バングラデシュ地域は、東パキスタンと呼ばれていたが、ウルドゥー語を公用語とする西パキスタン（現パキスタン）との対立が激化し、ベンガル語話者中心の東パキスタンは、一九七一年に「ベンガル人の国」を意味するバングラデシュとして独立した。また、一九四七年のインド・パキスタン分離独立によって、歴史的にベンガルと呼ばれていた地域は、バングラデシュとインドの西ベンガル州に分断された。したがっ

て、本稿では歴史的な呼称の変化に合わせてバンガラデシ（一九七一年から現在）、東パキスタン（一九四七～一九七一年）、ベンガル（一九四七年以前）の呼称を使用する。

ベンガルにイスラームが到来するのは一二世紀であるが、本格的なイスラーム化が始まるのはムガル朝（一五二六年～一八五八年）に入ってからだ⁵⁵。現在の首都ダッカを含む東ベンガルがムガル朝の支配下に置かれたのは、第三代アクバル帝（在一五五六～一六〇五年）の治世である。ムガル朝はスンナ派の王朝であったが、宮廷に仕えたエリートたちの二〇～三〇パーセントはイラン系で、その多くがシーア派だった⁵⁶。ベンガルにおけるイラン系の太守、官僚、商人、ウラマーらの活躍は、第三代アクバル帝の治世に始まり、第四代ジャハーンギール帝（在一六〇五～一六二七年）の治世でより顕著となる。ジャハーンギールは、シーア派のイラン系貴族出身の妃ヌールジャハーンを寵愛し、一六一七年には彼女の兄弟であるファトヒ・ジャングをベンガル太守に任命している。続く第五代シャー・ジャハーン帝（在一六二八～一六五八年）の治世にシャー・シユジャー皇子（シャー・ジャハーンの次男）がベンガル太守（在一六三九～一六四七年、一六五二～一六六〇年）となった。彼自身はスンナ派だったが、母に加え、二人の妻もシーア派だったことから、大勢のイラン系官僚が雇われた⁵⁷。現存するダッカ最大の歴史的シーア派宗教施設ホセイニー・ダーラーンが建設されたのもこの時代である。第六代アウランゲゼーブ帝（在一六五八～一七〇七）は、敬虔なスンナ派ムスリムとして知られていたが、彼の治世でもイラン系太守⁵⁸が活躍した。

一七一六年にベンガル太守となったムルシド・ハーン（在一七一七～一七二七年）は、翌一七二七に副知事制を導入し、ベンガルをデリーの中央政府から事実上独立させた。ムルシド・ハーンは、南インドのブラフマンの生まれだが、ムガル王朝に仕えるイラン人官吏に買われ、イラン式の教育を受け、シーア派となった。彼が太守を務めていた時代には、多くのイラン人官僚が雇われただけでなく、イラン系の教師、学者、医者などの知識人が活躍した。彼は、シーア派第三代イマーム・フサインの追悼儀礼を実施するためにムハッラムの一日から一〇日までを休日とするなど、シーア派の保護と発展につとめた⁵⁹。この他にもイランの宗教都市ゴム出身のイラン人で副知事となったジャスラト・ハーン（在一七五五～一七六二年、一七六五～一七七八年）のようにダッカのシーア派宗教指導者としても活躍したような

人物がいた。つづく英領統治期もイラン系のエリートやシーア派宗教指導者がベンガルに派遣されており、その多くがシーア派だった。つまり、シーア派は、ペルシア文化とともにムガル朝エリートの文化としてベンガルに紹介されたが、ベンガル人ムスリムのほとんどはスンナ派にとどまっている。

一九四七年にインドとパキスタンが分離独立した際に、インドのベンガル地方やグジャラート地方からベンガルに新たなシーア派が流入する。経済的に豊かな層が多く、定着した地域でイマームバーラー⁶⁰と呼ばれるシーア派の宗教施設を建設するなど、ベンガルにおける新たなシーア派普及の担い手となったが、彼らはウルドゥー語話者であったために、ベンガル語話者である地元ベンガル人との融合は進まなかった。やがてバンガラデシ独立運動が高揚すると彼らの多くはベンガルを去った。

一九四七年には、インドのビハール州から多くの難民が東パキスタンに押し寄せた。難民にはスンナ派とシーア派の両派が含まれている。彼らは、印パ分離独立の際にムスリムだという理由で土地を追われた人々だ。移住の際にインドに移住するヒンドゥーと土地を交換した人々もいたが、バンガラデシ独立運動の際にベンガル民族主義者からパキスタンの協力者とみなされ、土地を没収されただけでなく、多くが虐殺された⁶¹。生き残った人たちは、赤十字が全国一六か所に設置した難民キャンプに収容されが、一九七八年にパキスタン政府がバンガラデシに残った人々のパキスタン国籍をなく奪したために、キャンプの住人は無国籍者となってしまった。二〇〇八年、バンガラデシ建国時に未成年だったか、建国後に生まれた世代には、バンガラデシ国籍が与えられ、若い世代はベンガル語を学べるようになったが⁶²、キャンプの住人に対する差別が解消されたわけではなく、キャンプ内での劣悪な生活はほとんど改善されていない。

このような歴史の結果、出身地や流入の時期や経緯の異なるシーア派が、バンガラデシに暮らしている。彼らを大別すると、一、主としてムガル朝期や英領インド期にインドからベンガルに流入したイラン系のシーア派の子孫。二、シーア派に改宗したベンガル人。三、一九四七年のインド・パキスタン分離独立の際にインドのベンガル地方やグジャラート地方から東パキスタン側に流入した移住者（ムハージル）たちの子孫。四、一九四七年にインドの主としてビハール州から東パキスタンに難民として流入し、一九七一年のバンガラデシ独立の際に土地や財産をなく奪され、あるいは虐殺の対象となり難民キャンプに逃げ込んだ人々に大別できる。

右記のグループを言語によって分類することもできる。一九四七年以降にベンガルに移住した人々は、ウルドゥー語話者で、バングラデシュへの統合が最も遅れている人々である。ウルドゥー語は、独立戦争の際に戦ったパキスタンの公用語であることから、敵国の言語として否定的に受け留められてきた。

ムガル朝期にオールドダッカに定着した人々は、宗派を問わず、ダカイヤとよばれるウルドゥー語をベースにベンガル語の要素を取り入れた混雑言語を話し、ベンガル社会に溶け込んだ。ダカイヤは、ウルドゥー語やペルシア語話者だったムガル朝の支配層と地元のベンガル語話者とのコミュニケーションを促進するために生まれた言語で、オールドダッカの住人の共通言語といえる。ベンガル語話者は、ベンガル人改宗者ないしは、非ベンガル語話者を祖先に持つベンガル語化した人々で、ウルドゥー語とベンガル語のバイリンガルも含む。ムガル時代にペルシア語が行政語として流入したためにベンガル語の中にペルシア語彙が多く取り込まれたが、日常的には使用されていない。

ダッカのシーア派宗教施設とコミュニティ

シーア派の多くは、イマームバーラーの周辺に暮らしており、宗教施設の成り立ちとシーア派住民の来歴は密接に関係している。イマームバーラーとは、シーア派の第三代イマーム・フセインの殉教を悼む集会や儀礼等を行う施設であるが、礼拝、イフタール（日没後に食べる断食明けの食事）、宗教講話、子供たちのコーラン学習等、様々な活動に利用されている。

バングラデシュに現存するイマームバーラーの正確な数は明らかではないが、最も多いのはダッカだ^①。チッタゴン、サトウキラ、クルナ、シレットなどの地方都市にもイマームバーラーはあるが、主に東パキスタン時代に建てられたもので、ムガル朝期や英領インド期に建てられた歴史的イマームバーラーは、オールドダッカに集中している。オールドダッカで最古とされるイマームバーラーは、ブリガンガ河の堤に建てられたビービー・カ・ローザ（一六〇〇年建設、一八六一年建て替え）であるが、バングラデシュを代表するイマームバーラーは、一六四二年に建てられたホセイニー・ダーラーンである（写真①）。設立者のミール・ムラードは、シーア派第三代イマーム・フサインからイマームバーラーの建設を勧められる夢をみたために、建

設に取り掛かったという。現在、ホセイニー・ダーラーンは、国の歴史的遺産として内務省の管轄下に置かれ、若干の維持費を支給されるなど、他のイマームバーラーとは異なる扱いを受けている。

このホセイニー・ダーラーンに隣接しているのが、イマームバーラー・ミール・ヤークブである（写真②）。これは、ミール・ムラードの兄弟であるミール・ヤークブが建てたものである。この二つのイマームバーラーの周辺に三〇〇世帯ほどのシーア派が暮らしている。オールドダッカには、一七〇七年、アウランゲゼーブ帝の死去が伝えられた年に完成したというイマームバーラーもある（写真③）。このイマームバーラーは、家族ワクフになっており、管理者を務めているのは、ムガル朝期最後の知事（ナワーブ）を務めたサイード・チョットン・サーヘブの息子サイード・タキー・モハンマドである。タキーによるとチョットンは、英領統治に反対したためにナワーブ職を解かれたが、ナワーブの称号の維持と年金が与えられたのだという。この家族の母語はウルドゥー語であるが、ベンガルで教育を受けているために両言語に通じている。シャー・ショジャヤーがベンガル太守として赴任した際に連れてきた何百という人たちの一人が、チョットンの母方の曾祖父だったという。イマームバーラーは、タキー氏の自宅の敷地内に



写真① 改修前のホセイニー・ダーラーン（1999年撮影）



写真④ ムハンマドプールのシーア派モスク。敷地内にはこのモスクとは別にイマームバーラーもある。(2014年撮影)

写真② イマームバーラー・ミール・ヤークブ (オールドダッカ、2014年撮影)



写真③ チョットン・イマームバーラー (2014年撮影)

あるが、ムハッラムの追悼儀礼の際は、近隣のシーア派にも開放されている¹³⁾。

この他にもシャイスタ・ハーンの時代に建てられたイマームバーラー・バラ・カトラ、一九一一年に建てられたイマームバーラー・ムハンマディ・ベガム、ビルキーズ・ハーノム・ワクフ・イマームバーラー、一九〇〇年代初頭に建てられたイマームバーラー・ビービー・ザフラン・サルタネッサ・ハーノムなど、ムガル朝期から英領統治期に建てられたイマームバーラーが残っており、ムハッラムには、これらのイマームバーラーを拠点に追悼儀礼が行われている。

ダッカの新市街地には、東パキスタン時代にインドから流入した人たちが建てたイマームバーラーがあり、現在でも使用されている。一九六八年、当時、パキスタンの大統領だったアイユブ・カーンは、インドから移住した非ベンガル人に土地を与えたが、その時に建てられたのが、ムハンマドプール・シーア・モスク・イマームバーラーである(写真④)。イマームバーラーの建設を主導したのは、マウラナ・ギブラ (Maulana Syed Gulshahali Qibla) と、ナジャフで学んだパキスタン政府の役人ジャフリ (Dr. Syed Ajaz Hussain Jafry) の二人で、両人ともバングラデシュ建国とともに海外に移住した。建設当時は、数千人規模の宗教集会所が催されるほど多くのシーア派移住者がいたが、バングラデシュ建国を機に非ベンガル人移住者の大半が去り、参加者は三〇〇〜四〇〇人程度に減少した。現在は、ムハンマドプール周辺に一七〇あまりのシーア派世帯が暮らしており、約半数がベンガル語を母語とする人たちで、残りはウルドゥー語を母語とする人たちだ。

さらにムハンマドプールの難民キャンプには、一五のシーア派世帯が暮らす。そのうちの一族から家族史を聞いた。彼らは、一九四七年にインドのビハール州から当時の東パキスタンに移住する際にインドに逃げるヒンドゥー教徒と土地を交換し、八エイカーの土地を得たが、バングラデシュ独立運動の際にパキスタンの協力者だとみなされ、弟や親戚七人が目の前で殺された。さらに命が惜しければ土地を放棄せよと迫られたため、赤十字が用意した難民キャンプに逃げ込んで今日に至っている。ベンガル人との間の辛い体験は忘れたいが、この家族にとってシーア派であることが何よりも重要だという。シーア派人口が少ないため結婚相手を探すのが大変とのこと。この家族は、娘の一人をオールドダッカに暮らすシーア派に嫁がせている。宗教第一の姿勢が、異なるルーツを持つシーア派の融合を促進している

ともいえる。

ダッカの新市街ミールプールにあるミールプール・イマームバーラーには複雑な歴史がある(写真⑤)。印パ分離独立の際にインドから移住してきたシーア派がミールプールの六区に土地を購入してイマームバーラーを建てたが、一九七一年、バングラデシュ政府に土地を接収されてしまった。その後、国内にとどまったシーア派が中心となって裁判を起し、土地を取り戻すことに成功したが、すでに別の住人が専有しているという理由で代替地が提供された。現存するミールプール・イマームバーラーは、一九七七年に代替地に建てられたもので、イマームバーラーを囲む壁はイランの援助で設置された。周辺には、インドのウッタール・プラデーシュ州やビハール州出身のシーア派約一五〇世帯が居住しており、多くがウルドゥー語話者である。ミールプールには、このほかに家族ワクフになっているイマームバーラーが二つある。ミールプールは、一二のセクションに分かれているが、現在イマームバーラーがある一一区に暮らしているウルドゥー語話者の多くは、一九七一年に六区で発生したウルドゥー語話者への暴力から逃れてきた人たちだ。

マグバーザール・イマームバーラーは、バングラデシュ最大の紅茶会社として知られるイスファハニー・グループ (Ispahani Group) の支援によって設立された。イランのイスファハーンにルーツを持つイスファハニー家は、一九世紀初頭にインドのムンバイで事業を起したが、一九四七年の印パ分離独立の際に東パキスタンのチッタゴンに本社を移し、その後はバングラデシュ企業として紅茶を始めとする様々な事業を展開している(写真⑥)¹⁹⁾。

バングラデシュが独立した際に非ベンガル系シーア派の多くが国を去ったために、マグバーザール・イマームバーラーの周辺に暮らすシーア派住民は激減したが、今なお少数のウルドゥー語話者が暮らす。このイマームバーラーを拠点にバングラデシュ女性福祉協会 (Bangladesh Ladies Welfare Society) (一九六三年登録) の活動をしているウルドゥー語話者の女性によると、バングラデシュのシーア派は、言語的・宗教的マイノリティとして二重の差別を受けているために、経済的に困窮している家庭が多く、子どもを学校に通わせる余裕がないという。この協会は、貧困の連鎖を断ち切るために、全国で四〇〇あまりの学校に通う子どもたちに金銭的な補助をしている。協会は、イスファハニー・グループの他、イランを含む海外からの寄付に頼っているが、経済制裁の影響でイランからの支援は減っているという。

ダッカ新市街のプルナ・パルタンには、一九五〇年代中ごろにインドから



写真⑤ ミールプールのイマームバーラー (2014年撮影)



写真⑥ マグバーザール・イマームバーラー (2014年撮影)



写真⑦ ホージャ・イマームバーラーに保管されている旗。ムハッラムの際に使用する (2014年撮影)

移住した十二イマーム派のホージャの人たちが建てたホージャ・シーア・ジャマアト・イマームバーラーがある(写真⑦)。ホージャは、インドのグジャラート地方などに住むイスマイリー派の人々だが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて一部が十二イマーム・シーア派に改宗した。



写真⑧ ホセイニー・ダーラーンに収められているシーア派第二代イマーム・ハサンと第三代イマーム・フサインの棺のレプリカ (2014年撮影)



写真⑨ 金曜日、ホセイニー・ダーラーンに集まる女性信者 (2014年撮影)

宗教儀礼

普段は目立たないシーア派も、ムハッラムの一日から一〇日に行われるシーア派第三代イマーム・フサインの追悼儀礼の期間中はイマームバーラーに格納されているタアズィアとよばれる第三代イマーム・フサインの墓や棺のレプリカを担ぎ出して路地を行進する。ダッカでは毎年一〇万近い人たちが参加するといわれているが、参加者の八割から九割はスンナ派だ。スンナ派は、儀礼を鑑賞するだけでなく、儀礼の一部を担う。例えば、ホセイニー・ダーラーンの場合、一日は、オールド・バーザールのスンナ派住人が中心となって儀礼を組織する。ムハッラムの追悼儀礼にスンナ派も参加するのは、ムガル朝時代に追悼儀礼が、ムガル朝のエリートによってベンガルに紹介されたことと無関係ではない。ムガル朝のシーア派エリートは、ムハッラムの追悼儀礼のバトロンとして儀礼を振興し、ベンガルに定着させた^⑩。

ホセイニー・ダーラーンには、シーア派第二代イマーム・ハサンと第三代イマーム・フサインの棺のレプリカを安置した部屋があり、特に金曜日は棺に触れながら願掛けをする家族連れや女性たちで溢れかえる(写真⑧)。金

曜日の集団礼拝の後、ホセイニー・ダーラーンの向かいにあるスンナ派モスクが閑散とするのとは対照的に、ホセイニー・ダーラーンは一日中、女性信者で賑わっている(写真⑨)。ホセイニー・ダーラーンにはもう一つ特徴がある。それは、異教徒・異宗派にも開かれていて、スンナ派やヒンドゥー教の人たちも気軽に立ち寄っている点だ。

一方、礼拝や宗教集会は、シーア派のみで執り行われる。礼拝は男性が中心だが、宗教集会は女性の参加者の方が多い。断食月にはイマームバーラーで日没後のイフタルとよばれる食事が振る舞われるが、シーア派のイフタルの開始時間が、スンナ派よりも遅いこともあり、シーア派とスンナ派が同席することはない。

東パキスタン時代は、ムハッラムの追悼儀礼や断食月には、西パキスタンから招聘した宗教指導者のウルドゥー語による説教に大勢の信者が集まったが、バングラデシュ独立後は海外から宗教指導者を招聘することもなくなり、小規模なものへと変わった。残されたシーア派住民はウルドゥー語話者だったことからウルドゥー語による儀礼が続けられたが、ベンガル語教育を受けた若い世代が増えてきたために、最近ではベンガル語による説教が主となり、ウルドゥー語による補足が続くという方式が主流となりつつある。シー



写真⑩ ザイディー師 (改修前のホセイニー・ダーラーンにて、1999年撮影)

ア派儀礼のベンガル語化によりベンガル人の改宗者が増えたという。後述するナグヴェー師によるとムハッラムの追悼儀礼のようにスンナ派が参加する宗教行事では、宗派で見解の分かれるテーマは慎重に扱われる。たとえば、第三代イマーム・フサインの殉教について語る際には、フサインと敵対したウマイヤ朝第二代カリフ・ヤズィードへの直接的な言及は避け、フサインは「イスラームの敵」によって殺害されたといった表現に置き換えるのだという。

ダッカの宗教指導者

現在ダッカで活躍する宗教指導者は、イラクのナジャフ、イランのゴム、国内の宗教学院のいずれかで教育を受けている。バングラデシュ建国以降のシーア派を支えてきたのは、一九七八年から現在までホセイニー・ダーラーンの金曜礼拝導師を務めているインドのラクナウ出身のザイディー (Syed Rashed Hussain Zaidi) 師である (写真⑩)。ナジャフで学んだ後に布教のために立ち寄ったダッカで、シーア派の惨状を目的の当たりにし、ダッカに留まった。家族をラクナウに残しての単身赴任である⁷⁰。ザイディー師は、バングラデシュ建国後、この地に初めて定住した宗教指導者であり、シーア派の人々からの信頼が厚い。

現在、ザイディー師を支えているのは、イランの宗教学院に留学したバン

グラデシュ出身の宗教指導者たちである。イランで学んだ宗教指導者は、全国に三〇名程いると言われているが、そのうちの五名がダッカで活動している。そのなかでイランに最初に留学したのは、一九六四年ダッカ生まれのナグヴェー (Syed Atab Hussain Naqvi) 師である。イマームバーラーでコーランを朗唱していた時にたまたま居合わせた当時のイラン大使に認められ、大使の推薦で一九八四年にゴムの宗教学院に留学することになった。ダッカのガバメント・カレッジを卒業してからの留学である。ゴムでは、当時多くの留学生を受け入れていたホジヤティエ学院で学んだ後、ホメイニー師が教鞭をとっていたことでも知られる名門のフェイズイーエ学院に移っている。イラン留学中に結婚し、妻も、イランで生まれた娘もゴムにあるアル・ザフラー女子学院で学んだ。イランでの修行は、実に二二年間にも及び、その間に教鞭も執り、ダルセ・ハレレジと呼ばれるイスラーム法学の上級課程でも学んだ。ムジュタヒド (定められた方法に基づき法解釈を示す資格を有するイスラーム法学者) のレベルには到達していないが、十分な学識を得て帰国し、現在は国内各地のイマームバーラーで信者の指導に当たっている。ゴムで学んだ妻や娘も、ダッカで女性信者を対象に説教をしている。

レザー・ホセイニー (Syed Reza Hussain) 師も一九八〇年代前半にイランに渡った一人である。地元の公立学校を卒業後、イランに留学し、二〇年余りを過ごした。イラン滞在中にアル・ザフラー女子学院で学んだイラン人女性と結婚した。彼もホジヤティエ学院で学び、イスラーム法学の上級課程にも参加したが、ムジュタヒドにはならず帰国している。現在は、ザイディー師とともにホセイニー・ダーラーンをはじめ、ダッカ各地にあるイマームバーラーで導師を務めている。

レザー・ホセイニーは、ハーメネイー師の代理人としてフムス (五分の一税) と呼ばれる宗教税の徴収も行っている。シーア派信徒は、シーア派宗教界の最高権威であるマルジャア・アッタクラーイドにフムスを払うことになっているが、マルジャア・アッタクラーイドが複数いる場合、誰に支払うかは信者自身が選択する。ハーメネイー師は、イラン・イスラーム共和国の最高指導者であるが、同時にシーア派宗教界の最高権威であるマルジャア・アッタクラーイドの一人だともみなされているため、イラン国外からハーメネイー師にフムスを送ることは問題ないとされている。

アッバース師 (Muhammad Hashim Abbas) は、ホジヤ出身の宗教指導者である。イランのホジヤッティエ宗教学院で一三年ほど学んで帰国し、現在

は、ホージャのイマームバーラーの導師として信徒の指導に当たっている。ザイデー師に加え、イランに留学した三人は、マウラナ（宗教指導者）と呼ばれており、宗教行事の際には、ターバンにマントを着用する。

モハンマドプールのモスクとイマームバーラーで働いているホセイイン（Muhammad Manur Hossein）は、難民キャンプ出身の若者で、後述するクルナ宗教学校イスラーム教育センター（Islamic Education Center Kulna）で初級レベルの宗教教育を学んだ。現在は、マウラナが導師を務める金曜を除く平日の集団礼拝の導師を務めている。木曜日は、イマームバーラーで開かれる宗教教室の教師をしている。

イランからの支援

バングラデシュに暮らすシーア派は、一般にイマームバーラーで開かれる宗教集会やムハッラムの追悼儀礼の際に行われる宗教講話などを通じて、シーア派の教義について学ぶ。ホセイニー・ダーラーンの敷地内のマクタブ（イスラームの伝統的な初等教育施設）では、子どもたちにコーラン、シーア派の歴史、礼拝等の宗教儀礼などが教えられている。シーア派イスラームについての体系的な学習は、クルナ・イスラーム教育センター（Islamic Education Center Kulna）が担っている。この学校は、一九八〇年代にシーア派学問の中心地であるイランのゴムにある留学生監督委員会が設立したもので、開設の手助けをしたのは、ホジャッティエ学院に留学したばかりのナクヴィー師である。この委員会は一九八六年にイスラーム学世界センターと名を改め、さらに二〇〇八年にはアルムスタファー国際大学へと改組されたことから、現在クルナ・イスラーム教育センターは、アルムスタファー国際大学の提携校となっており、イランへの留学経験のあるバングラデシュ人教師が、ペルシア語の授業と初級レベルの宗教教育を行っている。クルナには、もう一つイラン人が設立した宗教学校もある。クルナが選ばれた理由は、設立当時、ダッカよりもシーア派への反発が少ないと判断したからだという。

イスラームの学問を本格的に学ぶためには、イランの宗教学院への留学は欠かせない。一九七九年にサッダーム・フセインがイラク大統領に就任し、シーア派への弾圧を強化したことから南アジアのシーア派の伝統的な留学先であったイラク南部の宗教都市ナジャフへの留学がむずかしくなった。代わ

りに新たな留学先として台頭したのがイランである。一九七九年のイスラーム革命によって誕生したイラン・イスラーム共和国において、最高指導者を始めとする体制の要職を担う宗教指導者たちを輩出してきたゴムの宗教学院は、一九八〇年代からイスラーム革命の成功に学びたいという世界各地のシーア派の若者を積極的に受け入れた。なかでもホジャッティエ学院は、一九九〇年代後半に留学生専用のイマーム・ホメイニー高等学院が設立されるまで多くの留学生を受け入れた¹⁸。経済的困窮者の多いバングラデシュのシーア派にとって、イランへの留学は、無償で高等教育を受ける貴重な機会でもあるが、イランが毎年受け入れてくれるわけではなく、留学のチャンスを手にした者たちは、運が良かったともいえる。

ダッカでは、アルムスタファー国際大学の支援により、女性のための宗教学校もスタートした。ダッカの新市街の高級住宅街にある六階建てマン



写真① ホセイニー・ダーラーンの敷地内にある図書館（2014年撮影）



写真② 図書館の設立に尽力したイランのシャフルーヒー師を讃えるプレート（2014年撮影）



写真⑬ 改修後のイマームバーラー。イラン様式のブルータイルが印象的(2014年撮影)

シヨンの一部で、バングラデシュ全土から集められた二〇名余りの女子生徒が寮生活をしながら宗教教育を学んでいる。

イランはまた、ハーメネイー師の代理人であるアーヤトッラー・シャフルーヒー師を通じてホセイニー・ダーラーンの活動を支援してきた。シャフルーヒー師は、バングラデシュ、タイ、ラオス、ミャンマーのシーア派支援を担当する人物で、毎年ダッカを訪問していたが、この数年は高齢による体調不良のため訪問していない。ホセイニー・ダーラーンの北側に位置する建物は、一九九四年、シャフルーヒー師の援助で図書館として改築された他、ホセイニー・ダーラーンの敷地内にある別の建物では、低所得者向けの診療所と歯科、それにパソコン教室が設置された(写真⑪⑫)¹⁹⁾。

また、二〇〇〇年から老朽化が激しかったホセイニー・ダーラーンの改修工事がはじまり、二〇〇六年、現在の新しいホセイニー・ダーラーンに生まれ変わった。改修の際に、ホセイニー・ダーラーンの外壁や内側の柱にはイランから持ち込まれたブルーのタイルが埋め込まれ、建物全体がイラン風に変った(写真⑬)。また改修の際にホセイニー・ダーラーンの内壁に描かれていた第三代イマーム・フサインが殉教したカルバラや初代イマーム・アリーをイメージした壁絵なども撤去された。

宗教支援を目的としているわけではないが、ダッカにあるイラン大使館直

属のイラン文化センターは、ペルシア語書籍のベンガル語翻訳出版に力を入れている。翻訳は、主としてダッカ大学でペルシア語を学んだ人たちが担当している。ムハッラムの追悼儀礼の際に詠む哀悼詩のベンガル語訳やハーメネイーによる宗教的事柄に関する解説書など、宗教関連書籍の翻訳も進んでおり、シーア派のベンガル語化に貢献している。

まとめ

総人口約一億五〇〇〇万のバングラデシュにおいてわずか六万ほどのシーア派は、これまでほとんど注目を浴びることはなかった。しかし、本稿で紹介したようにシーア派は、ベンガルの歴史と深くかかわっていることがわかる。スンナ派中心のバングラデシュにおいてシーア派は一貫して宗教的マイノリティである。またシーア派の多くが非ベンガル人であることから、シーア派はエスニック・マイノリティでもある。さらにベンガル人改宗者やベンガル語教育を受けた若い世代を除けば、シーア派の多くは言語マイノリティでもある。しかし、シーア派は、ムガル朝の支配エリートの文化としてベンガルにもたらされたため、ムハッラムの追悼儀礼は、スンナ派も参加する儀礼として定着するなどバングラデシュならではの特徴もある。インタビュ어의なかで繰り返し語られたことは、シーア派がよそ者扱いされているのは、宗派が理由ではなく、ウルドゥー語話者、つまりバングラデシュ独立戦争の敵国パキスタンの支持者とみなされたという点が大いという点だ²⁰⁾。

しかし、最近になって新たな緊張が発生している。サウジアラビアをはじめとする湾岸諸国への出稼ぎなどを通じてシーア派を異端とみなすワッハーブ派に触れたスンナ派のバングラデシュ人が、シーア派に対する批判を強め、中東で顕在化している宗派間の緊張をバングラデシュに持ち込み始めたのである。残念ながら二〇一五年のムハッラムの追悼儀礼の際に、それが現実のものとなった。シーア派第三代イマーム・フサインが殉教したムハッラムの一日(アーシューラー)に当たる一〇月二四日、追悼儀礼の参加者で溢れかえっていたホセイニー・ダーラーンで爆弾が爆発し、少なくとも一名が死亡、一〇〇名以上が負傷した。事件の同日、「ISIL(イラク・レバントのイスラーム国)バングラデシュ」を名乗る組織が犯行声明を出した²¹⁾。一二月二七日にも、バングラデシュ北西部の村でシーア派のモスクが攻撃され、一名が死亡した²²⁾。バングラデシュ政府は、両事件とISILとの関

わりを否定し、地元の過激派によるものだとの見解を出したが、事件の真相は明らかにされていない。中東における宗派対立が、バン格拉デシュに持ち込まれたことで、バン格拉デシュのシニア派は、新たな課題に直面している。シニア派への攻撃が一過性のものとなるのか、ますます激しくなるのか現時点では予断を許さぬ。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費 24401013 の助成を受けたものです。ここに記して、感謝を表します。

【註】

- (1) *Journal of the Royal Asiatic Society* (Isna 'Ashari and Isma'ili Shi'ism: from South Asia to the Indian Ocean), volume 24, issue 03, 2014.
- (2) Francis Robinson, "Introduction: The Shi'a in South Asia", *Journal of the Royal Asiatic Society*, volume 24, issue 03, 2014, p.353.
- (3) M.M.Faiz Shirazi, Hosseini Dalan, 1999. ホセイニー・ターラーン紹介冊子の一九九九年版。
- (4) 一九九九年の調査については、桜井啓子「調査報告 バングラデシュの十二イマーム・シニア派」『イスラム世界』五四号(二〇〇〇年二月)七―七五頁を参照。
- (5) James Heitzman and Robert Worden, eds., *Bangladesh: A Country Study*. Washington: GPO for the Library of Congress, 1989. <http://countrystudies.us/bangladesh/5.htm> (二〇一六年一月五日閲覧)
- (6) Masashi Haneda, "Emigration of Iranian Elites to India during the 16-18th centuries", *Cahiers d'Asie centrale*, 3/4, 1997, p.131,134.
- (7) *Banglapedia*, "Shi'ah", <http://en.banglapedia.org/index.php?title=Shi%E2%80%99ah> (二〇一六年一月一〇日閲覧)
- (8) アウラングゼーブ帝の時代に活躍したイラン系太守には、例えば、Mir Jumla II (1660-1663), Anirul Umara Shaisia Khan (1664-1678), Ibrahim Khan (1689-1698) などがあった。
- (9) *Banglapedia*, op. cit.
- (10) イマームバーラーは、西暦六八〇年イスラム暦のムハラム(第一月)の一日(アーシューラー)に、現イラク南部にあるカルバラーの荒野で殉教したシニア派第三代イマーム・フサインの殉教を悼むための *マサダ* 宗教儀礼を行う宗教施設。

- (11) ベンガル人のパキスタンへの敵意は、国内のビハリーに向けられ、何千人ものビハリーが虐殺された。Sumit Sen, "Stateless Refugees and the Right to Return: The Bihari Refugees of South Asia-Part I", *International Journal of Refugee Law*, volume 11, number 4, 1999, p.631.
- (12) 二〇〇八年、バングラデシュ高等裁判所は、ウルドゥー語話者のビハリーを両親に持つ若年世代に対して、一九七一年の時点で未成年であったか、バングラデシュ独立後に生まれた者には、バングラデシュ国籍を認めるとした。パキスタンへの帰属意識を持つ親世代とバングラデシュ国籍の取得を希望する若い世代との間には、温度差がある。Reuters (18 May, 2008). <http://in.reuters.com/article/id/INIndia-33636220080518> (二〇一六年一月五日閲覧)

- (13) タッカのシニア派が運営しているサイトによるとタッカには現在一七のイマームバーラーがある。 <http://azadari-bangladesh.weebly.com/about.html> (二〇一六年一月九日閲覧)
- (14) タキー氏へのインタビュー。(二〇一四年九月四日、タキー氏宅にて) チャットン・イマームバーラーについては、新聞でも紹介されている。The Daily Star (27 October 2014) <http://www.thedailystar.net/houses-of-mourning-47481> (二〇一六年一月九日閲覧)
- (15) イスファハニー家の来歴については、The Daily Star (20 March 2004), <http://archive.thedailystar.net/2004/03/20/440320050247.htm> (二〇一六年一月五日閲覧)
- (16) ムハラムの追悼儀礼にスンナ派やヒンドゥー教徒が関わっていたという記録もある。M.Mutakharri 'Islam', in Firoz Mahmud eds., *400 years of Capital Dhaka and Beyond*, volume II, Economy and Culture, Asiatic Society of Bangladesh, 2011, pp.342-343.
- (17) 桜井啓子「調査報告 バングラデシュの十二イマーム・シニア派」『イスラム世界』五四号、二〇〇〇年、七五頁。
- (18) イランの宗教学院の留学生政策については、桜井啓子『イランの宗教教育戦略：グローバル化と留学生』山川出版社、二〇一四年、五二―八三頁。
- (19) M.M.Faiz Shirazi *Hosseini Dalan* 2006. ホセイニー・ターラーン紹介冊子の二〇〇六年版。
- (20) ベンガル語は、ベンガル・ムスリムのアイデンティティの中核をなすものであるが、詳細は、M.G.Kabir, "Religion, language and nationalism in Bangladesh", *Journal of Contemporary Asia*, volume 17, number 4, 1987, pp.473-487.
- (21) BBC news (24 October 2015) <http://www.bbc.com/news/world-asia-34625375> (二〇一六年一月一日閲覧)
- (22) Aljazeera, (27 November 2015) <http://www.aljazeera.com/news/2015/11/decadly-attack-shia-mosque-bangladesh-151126195219476.html> (二〇一六年一月一日閲覧)